

氏名・(本籍地)	中島 慧 (千葉県)
博士の専攻分野の名称	博士 (文学)
学位記番号	甲第60号
学位授与の日付	令和2年3月14日
学位授与の要件	麗澤大学学位規則第5条第1項該当 (課程博士)
学位論文題目	日本における「忍者」のイメージ形成と定着 — 神仙道教要素のフィクションにおける受容と展開 —
論文審査委員	主査 岩澤 知子 教授 副査 井出 元 特任教授 副査 宮下 和大 准教授 副査 服部 英二 比較文明文化研究センター 客員教授

内容の要旨

・本研究の意義

本研究は、日本における神仙道教の展開の一例として、近世の都市部における宗教 (怪異、呪術) の娯楽化という点に注目し、幕末期の娯楽作品 (「妖術使いもの」を代表する作品である「ジライヤもの」) に登場する仙人や仙術の扱われ方を分析することによって、中国神仙道教における本来的な仙人譚の翻訳・翻案とも、仏教の修行僧と同一視される仙人とも異なる、近世日本の一般大衆が作り上げた独特の仙人観について考察した比較文化学的研究である。

本研究の学術的意義として、次の3点が挙げられよう。

- (1) これまでの「忍者」に関する先行研究が、主に日本国内の歴史研究に的を絞り、史実 (日本史) における忍者・忍術の実像を明らかにすることに主眼を置いていたのに対し、本研究は、日本における「忍者」のイメージ形成に大きな役割を果たしたのは、実は近世日本の都市部で流行した娯楽作品としてのフィクション (「妖術使いもの」を代表する作品である「ジライヤもの」) にあり、さらに、このフィクションとしての「ジライヤもの」のルーツが、中国道教の「神仙譚」に見出されることを明らかにしている。これによって本研究は、日本の「忍者」を論じる上で、中国神仙道教の影響を無視することはできない、という新たな視点を提供している。
- (2) 本研究は、上記のように、「忍者 (忍術)」のルーツを中国道教における「仙人 (神仙道)」に見出した上で、中国道教的「仙人」と、日本で普及した「忍者」の概念とを詳細に比較分析することにより、その両概念の根底に横たわる日中の思想傾向の違いを考察している。

- (3) 本研究は、「道教」に関する先行研究がこれまで中心的に取り扱ってきた、知識階級や宗教家中心の「道家思想」や「道教教団の教義」の宗教学的・哲学的分析にではなく、一般大衆によって支持された宗教的世界観の表れとしての「神仙道教」の分析に焦点をあてている。これは、日本における中国道教の受容と展開を考える上で、これまでほとんど省みられることのなかった「民俗学的視点」を取り入れることの重要性を指摘した新たな試みと言える。

・ 本研究の概要

第一部（第一・二・三章）では、日本の一般大衆における道教観の一端を明らかにするために、近世庶民文化の分析、主にフィクションにおける忍者・忍術に関する分析に焦点を絞り、中国の道教世界観の中で生まれた呪術的要素が、日本の近世庶民文化の中で、どのように受容・展開・消費されていったかを考察している。これは、フィクションにおける道教要素の日本的な受容・展開の一形態を見ることによって、一般大衆の理解・嗜好の反映として消化された道教要素を観察することができる、と考えたためである。本研究では、その道教要素は、最終的に「忍者・忍術」というものに集約されていった、と結論づけている。

さらに本研究では、「忍者・忍術」のイメージの原型として、「ジライヤ」というキャラクターを具体的事例として考察している。これは、「忍者・忍術」イメージの前景として「蝦蟇の妖術使い」があると考えられるためである。「蝦蟇の妖術使い」もののイメージの集約であるジライヤは、忍者・忍術のイメージの起点であると言えるだろう。ジライヤものは妖術の行使が全てであると考えられるが、忍者もまた、忍術の行使がそのイメージの大部分を支えていると言える。よって、「ジライヤ」ものを「忍者・忍術」のイメージの起点として考察し、その中の妖術等の超常現象がどのように描写されているかを分析することで、「忍者」の使用する「忍術」に対するイメージの方向性を示すことを試みている。

第二部（第一・二・三章）では、第一部で挙げた、日本の近世庶民文化における忍者・忍術のイメージ形成の基盤に、日本文化に取り込まれた神仙道教的呪術要素の強い影響があることを示すため、近世に至るまでの日本における、神仙道教要素の日本的展開について、主に「呪術」という点に注目して整理・分析を行っている。

中国道教には多数の呪術が存在するが、それは概して中国の神仙道教の中核である「不老不死」に至る手段のためのものであると言えるだろう。代表的な呪術は護身や避災のものだと考えられる。中国神仙道教においては、これらの呪術を用いて身体を守り、その間に「不老不死」の仙人を求める修行を行う、という工程が創造されている。これに対し、日本で受容・展開した中国神仙道教の呪術からは、興味深いことに、この「不老不死」という目的は脱落し、目的に至る手段であるはずの「呪術」がほぼ単体で陰陽道や修験道の中核をなすものとして存在している。

さらに、中国神仙道教では呪術の主な行使者である仙人（およびそれに類するもの）は、当然「不老不死」（またはそれを求める存在）を前提とするが、この「不老不死」という要素が脱落した日本においては、仙人像も当然のことながら変化し、その「不老不死性」よりも、「呪術性」が強調される傾向にある。このような日中の仙人観の差異を、我々はどう

考えればよいのだろうか。本研究は、ここに日本と中国における身体観の差異が存在するのではないかと考える。人間が「不老不死」の仙人に成るということは生身の肉体に対する変質・改造行為を意味する。中国においては、このように生身の肉体を変質・改造することによって「不老不死」の仙人に至るという行為が忌避されることがない。よって、中国では「不老不死」の仙人に至る可能性が一般大衆にまで広く歓迎される。それに対して、日本では、そのような生身の肉体に対する変質・改造行為は一般的な大衆の感覚としては、共感を呼ぶ行為ではないばかりか、むしろ忌避感を覚える行為であるため、生身の肉体を変質・改造する行為は、特殊な条件下にある、特別な人物である等といった、限定的な場合以外では受容されないのではなかろうか。よって、日本では、例えフィクションであっても、それは一般大衆の理解・嗜好・支持を前提として創作されるものであるため、やはり、そこで中国道教の様式に則った仙人を主役的立ち位置で存在させるのは難しいと、本研究は分析している。

本研究では、日本における道教要素の受容・展開の一例を示すものとして、フィクション、娯楽作品を取り扱っている。その理由は、フィクションの中の怪奇現象や超常現象または、怪異の描写は、主に読者である一般大衆の嗜好に基づいて創作されると見なされ、従って、一般大衆がそれに相応しいと感じる表現に道教的要素が用いられているという事実の中に、我々は近世江戸期における一般大衆の道教・道教的要素に関する理解、好みの志向の反映を見ることができる、と考えたからである。本研究は、道教の呪術、そしてその（主な）行使者である仙人の姿として「忍者」を想定し、これは日本的にかみ砕かれ、理解された仙人像の日本における終着点であると主張するものである。結局、中国道教の仙人・神仙道は、日本においては「忍者・忍術」として文学・文芸を基点とした庶民文化の中に保存されている、と言えるだろう。この「忍者・忍術」におけるイメージの大部分は「印を結んで呪文を唱えるとドロン」といった超常的存在として語られる。ここには、中国神仙道教において中核をなした「不老不死」という要素を脱落させる半面、「呪術」の受容については積極的であった、という日本特有の呪術に対する興味・関心の高さとその嗜好の在り方が見出されよう。

「呪術」とは、人間が超常に干渉し操作・支配するためのシステムである。日本における道教は教団組織の成立という方向では展開しなかったが、中国において道教世界観によって形成された呪術体系は日本でも魅力的であったのか、積極的に取り込まれている。しかしながら、この「呪術」の受容において、日本と中国との間には、意識の違いが存在する。中国道教において、超常を操作する「呪術」の主な行使者は、「不老不死」の肉体を持つ仙人である。が、日本では中国道教的な仙人は一般的な共感を得難い存在であるため、そのまま受容されることは無かった。そこで仙人の代わりに登場するのが「忍者」である。

フィクションにおける「忍者」とは、一般大衆が「生身の肉体」のままで、超常を操作できる「呪術」を駆使する存在として生まれたものである、と考えられる。日本では、中国道教的工程によって形成された仙人の根底的要素である「不老不死性」を脱落させると同時に、超常的な「呪術」のみを際立たせ、この超常的な「呪術」を「忍術」として、これを使用する「忍者」というものを創造したのである、と本研究は結論づける。

論文審査結果の要旨

学位論文審査では、本研究の学術的価値とその独創性を、以下の点において評価した。

- (1) 文学・歴史学・民俗学・宗教学といった広範な領域の文献を読みこなし、幅広い学際的アプローチを実践している。
- (2) 「神仙道教要素が日本でいかに受容されたか」を明らかにする一つの方法として、「忍者」に着目したことが、本研究に独創性を与えている。
 - ① 「忍者（忍術）」のルーツを中国道教における「仙人（神仙道）」に見出し、その中国道教的「仙人」と、日本で普及した「忍者」の概念とを詳細に比較分析することにより、その両概念の根底に横たわる日中の思想傾向の違いにまで考察が及んでいる。
 - ② これまでの「忍者」研究が、「史実としての忍者」といった歴史研究や、「忍者（忍術）の宗教的意味」といった宗教的観念論に終始していたのに対し、本研究は、近世の大衆娯楽として普及したフィクションの中の「忍者」にこそ、神仙道教要素の日本的受容の最終形態を見出すことができると主張することにより、「一般民衆による道教要素の受容（＝忍者）」といった民俗学的視点に立った、新たな忍者研究のあり方を提示している。
- (3) 日本における神仙道教の受容においては、中国神仙道教が目標とする「不老不死」はほとんど顧みられず、代わりに、そこで用いられる「(身体的) 呪術」の実践に強い関心が集まったことを、本研究は明らかにしている。この「呪術への強い関心」が、なぜ民衆の間に生まれてきたのか、さらに、そのような「呪術」へのこだわりは、日本独自の現象なのか、といったさらなる問いへの発展が期待される研究である。

さらに本審査では、上記の学術的貢献を評価したうえで、今後の考察課題として、次の3点を加えるべく指摘した。

- (1) 「仙人観」をめぐる日中の思想比較において、中国神仙道教が目標とする「不老不死」性が、日本ではほとんど顧みられなかったことを本研究は指摘しているが、このような「不老不死」性の脱落が、なぜ起こるのか。本研究は、この原因について「日本と中国における身体観の差異が存在するのではないか」と示唆するに留めているが、この「身体観の差異」とは何なのか、さらなる考察が必要であろう。
- (2) 本研究は、中国道教の中でも、「神仙道教」のみに焦点をあてて分析を行ったが、そもそも「中国道教」とは何なのか、それは「神仙思想」のみに還元できるものなのか、といった疑問が浮かび上がる。「道教」のもつ世界観は、本研究が方法論的に取り扱うことを否定した「哲学的存在論」の議論なしには語り得ないので

はないか。「道教とは何か」という、より広範な議論の上に立った研究の発展が、今後、望まれる。

- (3) 本研究を「近世の大衆文化論」として評価することもできよう。その場合、分析対象を日本に限定することなく、同時代（明清期）の中国において、「神仙道教」がどのように大衆文化に取り入れられていたのかを探るのは興味深い。中国における「神仙観」の近世的展開と、本研究が示した近世日本的展開とを比較分析することにより、比較文化研究の幅がさらに広がることを期待したい。

本審査を担当した委員全員は、本研究が、以上の総評と指摘に基づき、今後の考察課題としてこれらの問題を追記したことを確認したうえで、中島氏の学位申請論文を博士の称号に相応しいものと認め、「合格」の判定を下した。